

岡山大学・国際戦略ビジョン21の骨子

この『岡山大学・国際戦略ビジョン21』は、学都構想の実現を推進するための中長期的な国際戦略として策定するものである。

I. 大学の国際化・グローバル化をめぐる情勢（1頁～3頁）

- ・『グローバル化社会の大学院教育(答申)』
- ・東京大学が学部・大学院の全面的な9月入学の実施を検討
- ・グローバル人材育成のための円卓会議の発足
- ・研究・教育資金の重点的配分化による国立大学間の格差拡大
- ・アジア全域においても国際化・グローバル化をめぐる大学間競争が拡大

II. 基本理念（3頁）

本学が目指す国際化・グローバル化の基本理念

1. 世界水準の教育研究分野を擁した、個性的な国際学術交流の拠点となる。
2. グローバルに活躍する地域の中核的人材育成の拠点となる。

III. 基本方針（4頁～8頁）

1. 各部署の国際戦略の策定

全部局(法務研究科を除く)において固有の分野での国際戦略を策定することが重要

2. 国際的な人的交流の推進

- 1) 教職員の海外派遣、日本人学生の海外留学の拡大
3年をめどに現状の2倍化を目指す。
- 2) 留学生の受入れ拡大
3年をめどに700人に引き上げる。
- 3) 外国人研究者の受入れ拡充
3年をめどに年間300人に引き上げる。

3. 地域との連繫強化

国際的な学都の創成には自治体、経済界、各種団体の協力が不可欠

4. 海外ネットワークの組織化

① 留学生同窓会の設立支援、② 国際的学長間連繫の推進

5. 教職員・キャンパスの国際化

- ・教職員の海外研修等の機会を拡充（特に事務職員の英語対応能力の飛躍的向上）
- ・学内文書の英文化、外国人に配慮したキャンパス環境の整備
- ・外国人教員数を一定水準まで引き上げ

6. 国際化・グローバル化推進体制の整備

- ・国際戦略会議を設置する等により、総合的な国際戦略を策定・実践する推進体制を整備
- ・海外に拠点等を整備・拡充
- 1) 東アジア地域
 - ① 長春及び瀋陽事務所の機能を強化
 - ② 広島大学の北京研究センターの共同利用を実現
- 2) 東南アジア・南アジア地域
 - ① ASEAN 大学連合(AUN)との協定締結、バンコクに海外事務所設置
 - ② 「ベトナム・プロジェクト」の検討
 - ③ インド拠点について、感染症共同研究センターの将来展望を見据えて検討
- 3) ヨーロッパ地域
 - 有力大学との学術交流の拡充、優れた学生の受入れ体制整備
- 4) 北米・オセアニア地域
 - 語学研修プログラムの拡充、北米に拠点校の設置を検討
- 5) 中近東地域
 - 中近東の諸国の有力大学との学術交流を拡充、組織的な受入体制等を検討
- ・インフラ等の整備
 - ① 海外入試制度、② 学費免除・奨学金制度、③ 施設、④海外インターンシップ

岡山大学・国際戦略ビジョン21

岡山大学長 森田 潔

はじめに

2004年(平成16年)4月に法人化された岡山大学は、幾つかの点において前進を遂げてきたが、こと大学の国際化・グローバル化の領域においては、十分な成果を生み出すには至っていない。

しかしながら、岡山大学の今後の方向を勘案するとき、岡山大学の国際化・グローバル化は、一刻の放置も許されない事業であり、岡山大学が日本の大学において有数の地位を獲得し、国際的にも高い評価を獲得するためには、なお一層の飛躍を敢行しなければならない不可欠の分野である。

昨年4月以降、新しい大学執行部は、森田ビジョンのもと、国際的な美しい学都構想を掲げて諸課題に取り組んでいるが、とりわけここに中長期的な国際戦略として『岡山大学・国際戦略ビジョン21』を策定するものである。

I. 大学の国際化・グローバル化をめぐる情勢

2011年(平成23年)に入って、大学の国際化・グローバル化をめぐる状況は急速に進展している。昨年1月31日に出された『グローバル化社会の大学院教育(答申)』(資料1「同答申(ポイント版)及び同答申(概要)」)は、今後の重点的施策として、大学院の国際水準の質保証を担保した教育体制の整備、とりわけグローバルに活躍する博士の育成と産業界との連携によるグローバル人材育成の強化を打ち出している。それをうけて、東京大学が学部・大学院の全面的な9月入学の実施の検討に入り、他の旧帝国大学もそれに対応しようとしている。その帰趨はいまだ不明であるが、いずれにしても9月入学の実現はわが国の大学の国際化・グローバル化に極めて大きな影響を及ぼすことになる。また、日本を代表する20企業と12大学(旧7帝大、早大、慶大、東工大、一橋大、筑波大)が、グローバル人材育成のための円卓会議を開催し、具体的な施策の検討を始めている(資料2「文教ニュース第2148号抜粋」)。他方で、岡山大学・センターAGORA準備会と近隣自治体との協議のなかで明らかになってきたことであるが、地方自治体もまた、地域におけるグローバル人材育成を重点施策に掲げる事態となっている。こうした大学の国際化・グローバル化への

対応に関する社会的要請は、震災対応等の施策を別にすれば、我が国の最も重点的な施策になっているといっても過言ではない。逆にいえば、この分野において独自の体系的な施策を実践する大学だけが、大学らしい教育研究環境を維持していくことができると考えられる。

いうまでもないが、大学は静かな環境の下、真理の探究にいそしみ、長期的視点から真の大学教育に邁進すべきものであり、時の国内外の政治・経済から一定の距離を置くべきものであることは、これまでの長い経験から見て明らかである。しかしながら、近年の国家の財政状況の悪化から、研究・教育資金の重点的配分が急激に進行し、この過程で86の国立大学間の格差もまた急速に拡大していることも事実である(資料3「主要国立大学の科研費獲得額と教員数・大学院生数の相関図」)。また、大規模な総合大学が国際化・グローバル化に深く関連した外部資金を獲得し、研究教育環境の整備を急速に進展させてきたことも事実である(資料4「大学国際戦略本部強化事業最終報告書(抜粋)、平成21年度国際化拠点整備事業申請・採択状況」)。このまま岡山大学が国際化・グローバル化に対応せず、事態の推移を傍観することになれば、岡山大学は文系・理系を問わず、大学としての研究・教育の水準を維持できなくなることは十分に予想される。

この国際化・グローバル化をめぐる大学間競争は、欧米の諸大学のみならず、いまやアジア全域の大学にも拡大している。中国の様々な大学重点化策は、明らかに自国の大学ランキングの向上を志向しており、そのための“てこ”として外国人教員の雇用や優れた学生の海外派遣の大規模な拡大を図っている。さらにASEAN諸国、アラブ諸国、インドの大学の力量の向上も目を見張るものがあり、学位取得のため自国の教員・学生を海外に派遣する大規模な計画を発表している(資料5「『留学交流』2011年8月号(抜粋)」)。こうした国際的な状況に、岡山大学が適切に対応しなければ、国際的研究ネットワークの構築という点においても、岡山大学は取り返しのつかない大きな損失を被ることになる。

このような状況を念頭において、この間の岡山大学の国際化・グローバル化の実状を眺めれば、その実態は極めて憂うべき状況にあるといっても過言ではない(資料6「岡山大学概要2011(抜粋)」)。もちろんこの間、国際交流会館の完成、福居宿舎の留学生宿舎への転用改装、EPOK協定校の拡大と参加学生の増加、留学生同窓会の設立等、見るべき成果もあげている。しかしながら全体としては、岡山大学の国際化・グローバル化の水準は大きく改善されていない。岡山大学と同規模か、あるいは岡山大学が競合すべき大学と比較すれば、留学生数、教員の海外渡航者数は低水準にとどまっている(資料7「近隣国立大学及び国立六大学ける留学生数等比較」)。また、国際交流協定の数自体や、協定の実効性も十分なものであるとは言えない(資料8「平成22年度国際交流協定に基づく交流実施状況等調査の結果について」)。加えて、今年度実施した学内ヒアリングで明らかになったように、部局単位での継続的で一貫した国際戦略の策定の遅れが存在している。

他方、幾つかの分野において、また研究者個人の献身的努力によって、国際的な研究・教育交流も展開されている。今後はそれらの可能性をさらに引き出し、すくなくとも日本においてトップ10の大学に比肩しうる国際的展開能力を持つことが必要である。

II. 基本理念

1. 世界水準の教育研究分野を擁した、個性的な国際学術交流の拠点となる。
2. グローバルに活躍する地域の中核的人材育成の拠点となる。

こうした大学の国際化・グローバル化をめぐる情勢を踏まえつつ、岡山大学が目指す国際化・グローバル化の基本理念を明確にする必要がある。

いうまでもなく、岡山大学は総合的な大学であるが、研究・教育の全分野にわたって国際的・国内的競争における優位な地位を維持しているわけではない。また、スタッフの配置や博士課程の整備においても十分な状況にあるわけではない。したがって、他の有力な大学にオール・ラウンドに対峙することは得策ではない。

岡山大学の強みを活かし、真に個性的な分野で国際的水準に対応できる拠点を、当該分野の経験と討議の積み重ねのなかで、幾つかの分野に限って選定することが必要である。人文社会、教育、自然、環境、医歯薬の分野でどこをどのように国際化・グローバル化するかを部局間の連繋という方向も含めて、早急に検討すべきである。

さらに岡山大学の国際化・グローバル化にとって決定的に重要な視点は、地域で活躍するグローバル人材の育成という視点である。地域も今やグローバルな人材育成抜きには立ちいかななくなっている。教育、経済、行政、技術、医療の分野において、地域社会は外国語能力や国際文化理解への対応において岡山大学に期待するところが大きい。岡山大学はこのような地域の要請に真摯にこたえ、地域分権社会の到来に備えてグローバル人材育成のプログラムを早急に準備しなければならない。また、そうすることで岡山大学は真に個性的で国際的な大学としての評価を獲得することができる。

最後に我々が銘記すべきは、この大学のグローバルな展開は、世界に対する国際的貢献に資するという点だけではなく、むしろ岡山大学の大学としてのミッションの遂行に不可欠であるという点である。岡山大学の教育研究スタッフの力量も、優れた外国の研究者と競い合う中で鍛えられ、また岡山大学の日本人学生も、留学生との共同生活を通じて、あるいは自ら留学することで、人間としての多方面の力量が飛躍的に向上する。岡山大学の国際化・グローバル化は岡山大学自身の質的向上にとって不可欠の事業である。

Ⅲ. 基本方針

以上のような基本理念を実現するためには、以下に掲げる基本方針を遂行する。

なお、基本方針の推進には、関連する国の施策動向を注視し、競争的資金等を積極的に獲得していく必要がある。また、各部局の主体的な取組みが重要であり、そのために全学的な支援が必要と判断した取組みについては予算を重点的に配分する。

1. 各部局の国際戦略の策定

大学の国際化・グローバル化の根幹は、いうまでもなく研究・教育の質において真に高度で魅力的なプログラムを持つことであり、これによって国際的な研究者、学生の交流を促進することである。

岡山大学を個性的な国際的学術交流の拠点として、グローバル人材育成に対応した魅力的な教育研究プログラムを設置し、それによって優れた研究者、学生の国際的共同関係を拡充することが重要である。また、その場に優れた企業人の参加も含めた体制を整えることも必要である。

その点で早急に検討すべきことは、法務研究科を除く全ての部局において、固有の分野での国際戦略を策定することである。ただし、国際化の方向性や進め方には部局・分野で相違がある。例えば、高度な先進的研究や先進国との技術開発競争を重視する分野もあれば、開発途上国の課題解決に関心のある分野もある。それらをふまえて、研究者の相互派遣計画、外国語、とりわけ英語による教育プログラムの作成、国際シンポジウム・講演会の計画、国際的ピア・レビューの導入等を検討する必要がある。

なお、本学の国際化・グローバル化を推進する際の決定的な条件は、学生全体の外国語能力を飛躍的に向上させることである。それ故、各部局でこの点の改善方策を早急に検討すべきであり、とりわけ、この分野における言語教育センターの役割は大きい。

2. 国際的な人的交流の推進

国際化・グローバル化の進展は、人的交流の量的発展にも依存する。したがって当面以下の施策を展開する。

1) 教職員の海外派遣、日本人学生の海外留学の拡大

基本方針決定後、3年をめどに現状の2倍化を目指して以下の計画を遂行する。

① 教職員の海外研修機会を増やす。

その際重要なことは、教職員が海外で、外国人学生、大学スタッフ等に岡山大学の研究・教育の魅力を語ることであり、このような活動を通じて、国費留学生等の受入れや EPOK 協定校の拡大につなげることである。

② 語学研修、ショートビジット、短期交換留学、海外での共同学位取得を目的とした留学を含めて学生の海外派遣を促進する。

そのため、EPOK 協定校の拡充、協定校との間で実施する学生交流プログラム、語学研修プログラム、海外インターンシップの充実を図る。

2) 留学生の受入れ拡大

以下の数値目標を目指して計画を遂行する。

① 基本方針決定後、3年をめぐりに留学生数を700人に引き上げる。

根拠：2009年5月 627人、2011年5月 510人

[参考] ※ 広島大・千葉大 1,000人、神戸大・名古屋大 1,300-1,500人
留学生数は、組織的な海外拠点、魅力的な教育プログラム、英語による授業、海外入試等制度の充実による。

この数値目標は概ね平均して、現行の修士課程、博士課程の定員(合計1,000人)の約一割(70人、30人)、2年間で200人の増加分である。この増加分について、国費・私費、専門分野別、地域別の戦略を立てる。

② 6年後に1,000人を目指す。

目標値については、3年前後の達成度を踏まえ、内外の状況を分析し、再検討する。

3) 外国人研究者の受入れ拡充

以下の数値目標を目指して計画を遂行する。

① 基本方針決定後、3年をめぐりに年間300人に引き上げる。

根拠：ここ数年200人前後で推移

[参考] 広島大・千葉大・神戸大 400-550人

② 6年後に500人を目指す。

目標値については、3年前後の達成度を踏まえ、内外の状況を分析し、再検討する。

3. 地域との連携強化

国際的な学都の創成には自治体、経済界、各種団体の協力が不可欠である。岡山大学の真の国際化・グローバル化は、地域の協力なくして到底実現できない。

地域との協力は、インフラの整備の協力に限定されず、国際都市としての都市づくりへの協力連繫を含むものでなければならない。

その点で、岡山・国際学術都市構想会議の設置とその拡充は極めて重要な事業となる。とくに、グローバル人材の育成について、共同のプロジェクトを構築することが求められる。

4. 海外ネットワークの組織化

岡山大学の国際化・グローバル化の進展は、これまで蓄積してきた海外ネットワークの活用とその拡充抜きには実現できない。

そのために以下の事業に取り組む。

- ① 今年度設立された国内の留学生同窓会の活動を支援し、さらにそれを拡充させるとともに、海外同窓会を順次確立する。その際、外国に住む日本人 OB を含めて組織化することが重要である。
- ② これまでの協定校を中心に、国際的な学長間連繫体制を整備し、とくに中国、韓国、ASEAN、EU の諸大学との学長間連繫を推進する。

5. 教職員・キャンパスの国際化

大学の真の国際化のためには、教職員及びキャンパスの国際化は避けて通れない課題である。

そのためには、教職員の海外研修等の機会を増やし国際化対応能力の向上、とりわけ事務職員の英語対応能力の飛躍的向上、学内文書の英文化、外国人に配慮したキャンパス環境の整備等が不可欠である。

また、2011年(平成23年)5月1日現在、兼務を含む全教員の3%(61人)にすぎない外国人教員の数を、欧米の水準である20%を念頭に、岡山大学に相応しい数字目標(たとえば5%)を設定し、一定水準まで引き上げる必要がある。

6. 国際化・グローバル化推進体制の整備

本学の国際化・グローバル化を推進するための組織体制等の整備は喫緊の課題である。とりわけ国際戦略会議を設置することにより、教育・研究・社会貢献の全分野において国際化・グローバル化の方針を検討・調整し、総合的な国際戦略を策定・実践する推進体制を早急に整備する必要がある(資料9「岡山大学国際戦略会議概念図

(案)」。また国際センターの体制を整備し、全学的な国際戦略の企画立案機能を強化するとともに、学生派遣事業、留学生受入れ事業、国際プログラムを拡充する必要がある(資料10「国際センターの体制整備について(案)」)。

さらに、以下のとおり海外に拠点等を整備・拡充し、研究・教育の交流、学生派遣、留学生受入れにおいて、機能的かつ機動的に対応できる体制を整備することも重要である。

1) 東アジア地域

- ① 長春及び瀋陽事務所の機能を強化し、またオネックスの推進体制を充実して、同プログラムの博士課程への拡充等を行い、中国東北部の有力大学との学術交流を深化させ、優れた学生の相互派遣体制を構築する。
- ② 広島大学の北京研究センターの共同利用を実現し、そこを拠点として、山東大学等中国中部の有力諸大学との学術協力を拡大及び現行の協定校との交流を拡充する。

2) 東南アジア・南アジア地域

- ① ASEAN 大学連合(AUN)との協定を締結し相互派遣制度を確立するため、バンコクに海外事務所を設置する。それを踏まえてタイ、インドネシア、ベトナムの諸大学への関与を戦略的に行う。
- ② 「ベトナム・プロジェクト」については、フエ大学との協働プログラムの拡充、ダラット大学との交流プログラムの再構築を検討する。
- ③ インド拠点については、感染症共同研究センターの将来展望を見据えて検討する。

3) ヨーロッパ地域

- フランス、ドイツ、東欧諸国その他の有力大学との学術交流を拡充し、優れた学生の受入れ体制を整備する。とくにEUの学術拠点の一つであるストラスブール大学との学術交流を深化させ、教員、学生間のネットワークの拡充を行う。

4) 北米・オセアニア地域

- 日本人学生の英語能力の向上のために、現在海外で実施している語学研修プログラムの拡充を検討するとともに、北米に拠点校の設置を検討する。とくに9月入学の実施をにらみつつ、半年間の海外研修プログラムの設置を検討する。

5) 中近東地域

- 中近東の諸国、とりわけサウジアラビアの有力大学との学術交流を拡充し、同地域との国際交流を持続的なものとするための体制整備を検討する。

また、留学生・外国人研究者の受入れ、日本人学生の海外派遣を促進するための

様々なインフラ等の整備に努める。当面以下の点について早急に対応する。

- ① 海外入試制度の検討
- ② 学費免除、奨学金制度の再検討
- ③ 施設の整備
- ④ 海外インターンシップの充実

結びに代えて

日本社会の急激な変化と大学間格差の急速な拡大、さらには大学間をめぐる国際的競争の進展の中で、岡山大学が真の教育研究機関として存続していくために、私たちは今大きな決断の前に立たされている。

岡山大学が、日本全体や地域のグローバルな変化に対応した国際的な学術機関に生まれ変わるか、否かという課題が突きつけられている。この道は構成員に一時的な緊張を強いることになるかも知れない。しかしながら我々は、構成員の衆知を集め、高い志のもとにこの道を邁進すれば、5、6年後には新しい岡山大学の像が見えてくると確信している。

資料編

資料1 「グローバル化社会の大学院教育(答申) ポイント版及び概要」

※ 全文は、以下を参照

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/03/04/1301932_01.pdf

資料2 「文教ニュース第2148号抜粋」

資料3 「主要国立大学の科研費獲得額と教員数・大学院生数の相関図」

資料4 「大学国際戦略本部強化事業最終報告書(抜粋)、平成21年度国際化拠点整備事業申請・採択状況」

資料5 「『留学交流』2011年8月号(抜粋)」

資料6 「岡山大学概要2011(抜粋)」

資料7 「近隣国立大学及び国立六大学ける留学生数等比較」

資料8 「平成21年度国際交流協定に基づく交流実施状況等調査の結果について」

資料9 「岡山大学国際戦略会議概念図(案)」

資料10 「国際センターの体制整備について(案)」